

特にカブールを制するまでには2〜3年かかるというインテリジェンスの評価は大いなる間違いで、8月末の米軍撤退期限を前に8月15日にはカブールはタリバンの手に落ちた。アフガンからの脱

米国の最も長い戦争は終わった。米国が撤退を急いだ背景にはバイデン大統領自身の上院外交委員長やオバマ政権の副大統領としての経験から、米軍の役割はテロ対策の役割に限るべきだという強い想いがあつたからなのだろう。しかし、撤退は拙速に過ぎたという批判は免れられないだろう。

グローバル・スコープ

アフガン撤退 《跡を濁す》



アフガニスタンから脱出するため米軍機に乗り込む人々
(8月22日、カブール=EPA時事、米軍提供)

出を希望したアフガン人のすべてを退避させることはできず、米軍は撤退し、諸外国の退避作戦も終わりを告げた。残念ながら日本の危機管理能力は十分で

た。

初動が遅れた日本は自衛隊機を派遣したにもかかわらず、1人の邦人の輸送ができただけでアフガン人協力者は1人たりとも退避させることはできなかった。残念ながら日本の危機管理能力は十分で

米、繰り返す 出口戦略軽視

はなかった。幾つかの難問が残る。残されたアフガニスタン人に危害が加わるのではない。タリバンが従来のように人権無視の原理主義的圧政を敷くのではないか。そのような懸念を払拭する上で、諸派も入った包括的な政府ができる可能性はないか。タリバンに反対する「イスラム国」(IS)や他の武装勢力がテロや戦闘を引き起こし、内戦状態になる可能性も否定できない。いずれにせよ、日本も国連や先進7カ国(G7)といった多国籍間の枠組みの中で状況を見極め、タリバンとの対話を欠かしてはならないのだろう。残されたアフガンの人々の安全確保に全力を尽くさなければならない。



日本総合研究所
国際戦略研究所
理事長

田中 均

「アフガンを見捨てた」米国のクレディビリティは損なわれたか。少なくとも中国やロシアは米国の価値の押し付けは誤りであつたと喧伝する。そもそも2001年の9・11事件の直後から始まつたテロとの戦い、およびイラク戦争のいずれにおいても米国は十分な出口戦略を持たなかった。イラクでもサダム・フセインは追い落とし、たが、民主的で安定した国家になったとは言えない。アフガンでもテロを防止するという本来の目的ですら達成されたわけではない。(第2・第4水曜日に掲載)

膨大な人命と資金を費消した二つの戦争が教えることは、仮に軍事力の行使がやむを得ないと思われる時でも、事前及び事後の綿密な外交戦略が重要だという事だ。

今後、米国は軍事力の行使に極めて慎重になるだろうが、例えばアジアで米国の重要な国益がかかった安全保障上の義務の履行に躊躇することはなからう。重要なのは軍事力の行使がやむを得なくなる前に同盟国とともに外交を尽くすことなのだろう。